

【日時】2009年5月2日(土)～5日(火)

【メンバー】中村(L)、田辺(利)、斎藤(健)

昨年の小黒部谷に続き、今年も縦走山スキーをしたくて、このルートを選んだ。本当は、逆コースで針ノ木雪渓をフィナーレとしたかったのだが、雪不足で針ノ木谷は渡渉必至なので、烏帽子から高瀬ダムへ下山するルートを考えて。さらに、アプローチや滑走距離を考慮して、最終的に南下ルートに決定した。(中村)

【1日目】

夜行列車で寝不足気味の目を擦りながら、ブナ立尾根を登って行く。対岸の南斜面では、岩の崩落がとめどなく続き、どこかの戦地での集中爆撃を見ているようだ。2100mからはスキーを履いて登れるようになり、ペースを上げて稜線まで。烏帽子小屋の前のベンチで明日からの山を眺めたりして、穏やかな午後のひと時を過ごした。(斎藤)



烏帽子小屋から三ツ岳方面

【2日目】

空気はいくぶん緩んだ春の朝だが、斜面は固い。先が長いので、斜面が緩むのは待ってられなく出発する。



二ノ沢右股

カップは滑る。ちょっとした尻餅でも、スーッと滑っていく藪っぽい斜面をトラバース。二の沢に入る。

だぶん一生のすべてをささげるのに等しいといってもいいほどの、横滑りだった。本場アルプス帰りの斎藤くんはとっくにこなしているのだが、こちとらへなちょこテレマーク。中村Lのエッジの音が響いている。それに負けじとエッジを効かして、「深森の、何が楽しい、山スキー

」というかんじで、蟹さながらに降りて行く。情けないことに沢床に降り立ち、平になってやっとスキーらしくなり、沢がところどころ割れている2150の二俣から

三ツ岳めざして登り返す。稜線に出ると「夏山縦走ですよ〜」っムッシュ齋藤。従来のルートは稲妻コースと呼ばれたように、按部から東沢めざして滑る込むはずだった。だが、しかし。マドモアゼル・リカが最も苦手としている縦走がはじまった。

「スキーを担いで歩く会」を結成したわれわれは、目指せ野口五郎岳！ 遠くにみえる人影は、ムッシュ齋藤&中村Lのものであった。野口五郎岳の手前で珍しい縦走Pに出会う。川崎市役所の方々であった。気を取り直して、白い雪面に板を滑らす。五郎池を目指して至福の一時である。

東沢めざして快適斜面が続いた。降り過ぎ注意！ をモットーに東沢右岸の2300あたりでほんとうにステキな森にて幕。（田辺）



滑る予定だった三ツ岳西斜面
(六ノ沢源頭)

【3日目】

昨夜は東沢の底で幕のため、天気予報が一切聞けなかった。天気は高曇りで悪くはないが、寒気が流れ込み遭難が多数発生した1週間後だけに、天気が気になる。

今日はまず水晶小屋を越えなければならぬ。標高差600m。右岸台地のテン場から東沢右岸の斜面を斜めに真っ直ぐ登っていく。所々アイスバーンが出てくるが、スキーアイゼンのない私は蹴り込んで進む。2600mの台地で休憩。ここからは、板を背負いアイゼン歩行とする。水晶小屋から滑り込んだ2人分のシュプールとトレースが残っていた。



東沢への滑走



水晶小屋から烏帽子方面

水晶小屋から見渡すと、どの方向も山ばかり。まさに北アを中心である。なかなか来られない場所なので、大した標高差ではないが岩苔小谷に滑り込むことにした。稜線付近には雪が付いておらず、少し下った場所で滑走準備。

ここで、齋藤君が板を流してしまう。あっという間に加速して視界から消えた。私が下りて探すことに。視界から消えた場所から念入りに探す。ふと後ろを振り返ると、ハイマツに引っかかった板を発見。上にい

る二人に「あったよ～」と叫ぶ。

田辺さんは滑って、斎藤君は尾根を下りてきて、合流。それにしても、北アの中心で板をなくすと、この先すべて歩いて下りなければならず、大変なことになる。見つかってよかった。

岩苔小谷は、雪も緩んでおり快適だった。再びシールをつけて、岩苔乗越へ登り返す。乗越に上がる場所は、雪が悪く板を片側外して、それを雪にさしアンカーにして乗り越える。と同時に、黒部源流から三俣蓮華にかけての真っ白な白いが見え、ようやく山スキーに来ている感じがした。

ここから先は、来たことのあるルートだけに、気が楽だ。源流部を滑走し、シールを付け三俣山荘へ登り返す。

三俣山荘から予定ルートの弥助沢方面を見るとやはり黒い。東沢では2100mから下は雪が無かった。弥助沢はその程度の標高であり、また天気も心配な

ので、沢ルートはカッ

トして稜線通しに双六岳を目指すことにする。ここで休憩をしていると、雷鳥がやってきた。3人に追い込まれると、空を飛んで逃げていった。

以前の山行でここから双六小屋に戻るときに、トラバースルートを通ったのだが、尾根を乗り越す部分が急傾斜で、なんとなく嫌な覚えがあったので、今回は三俣蓮華山頂から稜線通しに行くことにした。

三俣蓮華山頂で休憩していると、霧の中から山スキーの一団が現れる。話を聞くと、早稲田VVだ。立山からオートルートをやってきたのだという。引率していたコーチは、昨シーズン大渚山でお会いした方だった。それにしても、学生でオートルートとはうらやましい。

シールをつけたままで双六岳を目指す。霧の中、雷鳥のつがい。今回の山行では、よく雷鳥に会うものだ。最後の登りで、田辺さんのペースが大きく遅れた。山頂に着



岩苔小谷の滑走



岩苔乗越



黒部源流の滑走

くと、寒いと言っている。もっと休憩したそうであったが、16時を過ぎているので、霧の晴れ間を突いて出発する。



三俣蓮華岳



双六カール

2人は、スキーを担いで、アイゼン装着。ディアミールの私は、斜面の感覚を楽しむべく、スキーアイゼンで登って行く。デブリやら、深い滑走痕やらでキックターンに苦勞する。ちらちら後ろを振り返るが、田辺さんも、頑張っけて登ってきているようだ。

大ノマ乗越では、雪が緩むのを半時ほど待った後、滑降。白と茶色のコーヒーミルク斜面。茶色い部分は緩いので、白い部分をつないで滑って行く。斜面が広いのと、自分のスキーは長さがある安定度抜群なので、快適クルージング滑降。もっと、もっと滑っていたいと思っても、あっという間に左俣谷との出合に到着して滑降終了。

あとは、穴毛沢を観察したり、雪の下から覗いている山菜や満開の桜を愛でながら、

やはり双六カールは快適だ。楽しい滑走が続く。喉を過ぎると、二股だ。11時間も行動して、みんな疲れているので、ここに幕を張る。

テントに入ってから、田辺さんは食事ほとんど食べず、横になっている。心配したが、暖かい甘いお茶を飲んだら、少し元気になったようだ。(中村)

【4日目】

朝起きると、田辺さんの体力は、少し戻ってきたようだ。昨晩は無言だったが、今朝は喋っている。今日は、ちょっとした登りしかないので、なんとかかなりそうだ。

朝食の準備をしていると、早稲田のワングルがテントの前を滑って行く。とりあえず、挨拶。それにしても、日の出とともに行動する大学生達は、山屋の鏡。荷物も、僕らの倍はありそうだし。

遅れること1時間。固めの斜面をシャワーと滑り、大ノマ乗越の下に到着。テレ



大ノマ乗越



新徳高温泉までの長い林道を下っていった。(斎藤)

【感想】

今年のGWは、雪不足が心配されたが、思っていたところはだいたい滑れて、満足のいくスキー合宿となった。(斎藤)

昨年にひき続きのGW縦走スキー。ぎりぎりのところで連れて行っていただけたが、もう今年で最後だろう。ほんとうにありがとうございました。この素晴らしい思い出を胸に、今後の人生生きていきます～。(田辺)

雪不足を想定した計画を立てたつもりだったが、予想以上に雪が少なく、谷ルートから稜線ルートへ変更せざるをえなかった。東斜面は真っ白だけど、西斜面は真っ黒という稜線が多数あり、雪不足の時にはスキールートとして東斜面を選んでおくことが重要だと感じた。計画通りのルート取りにはならなかったが、予定していた下山口まで貫徹でき充実した山行となった。メンバーに感謝です。来年も行きましょう！(中村)

【地形図】 烏帽子岳、薬師岳、三俣蓮華、笠ヶ岳

【行程】

1日目：高瀬ダム (6:58)～2100m地点 (12:20/48)～烏帽子小屋 (3:54)

2日目：烏帽子小屋 (7:00)～二ノ沢二股 (7:49/8:08)～三ッ岳東のP (10:53)～野口五郎岳 (1:20/44)～東沢谷右岸台地テン場 (2:45)

3日目：テン場 (6:08)～水晶小屋 (9:10)～岩苔乗越 (11:22/49)～黒部源流登り返し (12:25)～三俣山荘 (1:04/23)～三俣蓮華岳 (2:34/57)～双六岳 (4:13)～双六谷二股テン場 (5:08)

4日目：テン場 (7:22)～大ノマ乗越登り返し (7:48)～大ノマ乗越 (8:24/9:02)～林道出合 (9:57)～新徳高温泉 (12:10)

【移動距離】

1日目：4.0km、2日目：7.8km、3日目：9.8km、4日目：10.7km、計：32.3km

地崩れの音もかきけす 腐れ雪
二の次に響きわたるは 横滑り
憧れのカールは何処 浅き夢
夏道を斜面求めて 彷徨いし

